

# 本願寺史料研究所報

4 7 号

発行所 本願寺史料研究所

〒六〇〇―八二六八

京都市下京区七条大宮上ル

龍谷大学大宮図書館内

電話 〇七五―三四三―三三一―

内線(五四一八)

発行者 所長 赤松徹眞

発行日 二〇一四年七月一五日

## 「本願寺七不思議」について

――「名所」としての近世本願寺――

大原実代子

はじめに

西本願寺（以下、本願寺と略す）には「七不思議」と言われるものがあるのをご存じだろうか。

一般に、「七不思議」といわれるものは、全国各地に存在しており、それには一定地域の範囲内に見られるものを指す場合（「越後七不思議」・「江戸七不思議」など）と、ある特定の寺院内におけるものを指す場合（「本願寺七不思議」・「知恩院七不思議」など）がある。ただし、一般にこの「不思議」というのは、いわゆる「不可

思議なもの（こと）」という意味合いよりも、むしろ「珍しいもの」という意味で使われていることが多い。したがって、江戸時代の「本願寺七不思議」というのは、本願寺にある七つの不思議な、あるいは珍しいもの（こと）を指している。また、史料では「七奇異」「七異」「七宝物」と書かれる場合もあり、これらにはいずれも「ななふしぎ」と読み仮名が記されている。

ただ、「七不思議」とはいつても、必ずしも七つに限っておらず、七つなくても「七不思議」といつている例もあるようである。

### 「本願寺七不思議」の内容

それでは、その「本願寺七不思議」の内容とは、どのようなものであったのだろうか。調べていくと、いろいろな「七不思議」があり、時代によって取り上げる七つ

の内容が異なっていることがわかる。

幕末に刊行された『本願寺七宝物由来（ほんがんじななふしぎゆらい）』（以下、『七宝物由来』と略す。本文は後掲）という版本があり、ここには、①木製の龍頭、②時の太鼓、③御影堂向拝柱の杵石、④白洲手水鉢、⑤大仲居の三面大黒、⑥梟の灯籠、⑦西山御坊のケチケチの面、以上七つが挙げられている。

これが大正期になると、「本願寺七不思議」には二種類あるとされている。<sup>1)</sup> その一つは、①総門棟の天狗瓦、②虎の間前庭の鶴亀の松、③唐門に蜘蛛が巣をかけない、④中雀門に雀が棲まない、⑤堀川石垣の轡の定紋入りの「見残石」、⑥鬼の手水鉢、の六つで、七つ目は不明としている。

もう一種類は、①木造龍頭吊、②三面の大黒、③つじ胴の太鼓、④水噴の銀杏、⑤行儀の富士、⑥見えかくれの月、⑦木造の土台、である。

また、田中緑紅の「西本願寺の七不思議」というコラム<sup>2)</sup>では、先の二種類の「七不思議」以外に、『諸国珍談集』には、①天狗の瓦、②太鼓の胴、③噴水銀杏、④百日紅の礎、⑤木製の龍頭、⑥三面大黒、⑦鬼の手水鉢、の七つが挙げられていると紹介している。なお、この『諸国珍談集』が、どのような書物であるか、その詳細については不明である。

以上の「七不思議」を整理してみると、次のようになる。なお、（ ）に示したのは現在の所在である。

ア 釣鐘の木製の龍頭（重要文化財の梵鐘の龍頭、安穩殿南側に安置）

イツツジ胴の太鼓（太鼓楼内に安置）

ウ 向拝柱杵石が百日紅の木製（御影堂向背柱土台）

エ 鬼の手水鉢（白洲手水舎内か）

オ 大仲居の三面大黒（所在不明）

カ 梟の灯籠（黒書院庭）

キ 西山御坊のケチケチの面（本願寺収蔵庫内）

ク 総門の天狗瓦（吉崎別院へ移建）

ケ 鶴亀の松（現在は枯死、『本派本願寺真宗写真宝典』に写真あり）

コ 唐門に蜘蛛が巣をかけない（境内南の国宝唐門）

カ 中雀門に雀が棲まない（国宝唐門北西にある門）

シ 見残し石（御影堂門前堀川の石垣）

ス 水噴き銀杏（御影堂前大銀杏。京都市指定天然記念物）

セ 行儀の富士（飛雲閣三層「摘星楼」床の間絵）

ソ 見え隠れの月（飛雲閣一層「招賢殿」床の間絵）

と、合計十五もの「七不思議」が存在しており、現在でもオとケ以外の存在が確認できた（エは不確定だが）。

アは、天文十六年（一五四七）、太秦広隆寺より買得し、石山本願寺に安置されていたが、本願寺の寺基移転にともない、京都に移された。長らく飛雲閣の北にある鐘楼に釣られていたが、平成八年（一九九六）四月、全

国講社連絡会によって新たな梵鐘が寄進されたことによつて、現在地（安穩殿南）に移動したものである。

オの三面大黒は、豊臣秀吉の寄附、左甚五郎作と伝えられていたもので、明治六年（一八七三）に小今井潤治へ預けられた<sup>3</sup>。同年に大仲居を取り壊した際に取り出し、豊前の豪商小今井氏の手に移ったようである。

キのケチケチの面は、もとは西山御坊にあったものであるが、現在は本山収蔵庫内に安置されている。いつ西山から本山へ移されたのかは不明である。明治二十五年刊行の『本派本願寺名所図会』には西山別院の由緒宝物の末尾に挙げられているので、少なくともこのころはまだ西山別院にあったようである。

クは、「本願寺北之総門」と言われていた門である。幕末の元治元年（一八六四）の蛤御門の変で京中が大火に見舞われた際に、この門が本願寺への類焼を防いだとして、「火消し門」とも呼ばれた。昭和二十四年（一九四九）撤去されることになったため、京都から吉崎別院へご門徒の方がたの手によって運ばれ、「念力門」と称する別院の山門として現存している。

#### 『本願寺七宝物由来』の刊行

それでは、この「本願寺七不思議」とは、いったいつごろから称され始めたのだろうか。

現在もよく知られている最もポピュラーな京都の名所

案内記の一つである、『都名所図会』（安永九年（一七八〇）刊）には、太鼓楼の太鼓や大仲居大黒天についても書かれているが、太鼓の胴がツツジの木であることや三面大黒であるという特徴的なこと、不思議の由来といえる珍しい点については書かれていない。ケチケチの面は、本願寺ではなく、西山御坊の項にその名前の由来が書かれているが、「七不思議」という文言は出てこない。

また、江戸時代における本願寺の通史ともいえる慶証寺玄智の記した天明五年（一七八五）刊の『大谷本願寺通記』でも、七不思議にあたるような記述は、いつさい出てこない。

史料研究所には、先の『七宝物由来』を所蔵・保管している。これは江戸時代以降、本願寺に伝来してきた史料として研究所で保管・管理している他の史料とは異なり、本願寺の関係資料として、平成十三年（二〇〇一）の第五十一回京王古書市で購入したものである。縦一五・四 cm × 横一一・六 cm、全八紙（表紙・裏表紙を含む）の小冊子で、第一紙目表紙左上に「本願寺七宝物由来」と題箋様に書かれている。また、表紙右中央には「平安／長秀写」とあって、鐘楼および梵鐘の絵が描かれ、さらに鐘楼は薄黄色で彩色されている。

この「長秀」というのは、おそらく、幕末期に大坂・京都で活躍した浮世絵師中村長秀（号有楽齋）のことであると思われる。この人物については、生没年は不詳であるが、「合羽摺の役者絵を多く作り、（中略）極めて多

作の人で、合羽摺の作者として、第一人者である。また錦絵の作もある。従つて作画期も長く、文化の初めから、天保弘化の頃に及んでゐる。(中略) 上方絵に於ては優秀なる人である」と紹介されている<sup>(4)</sup>。

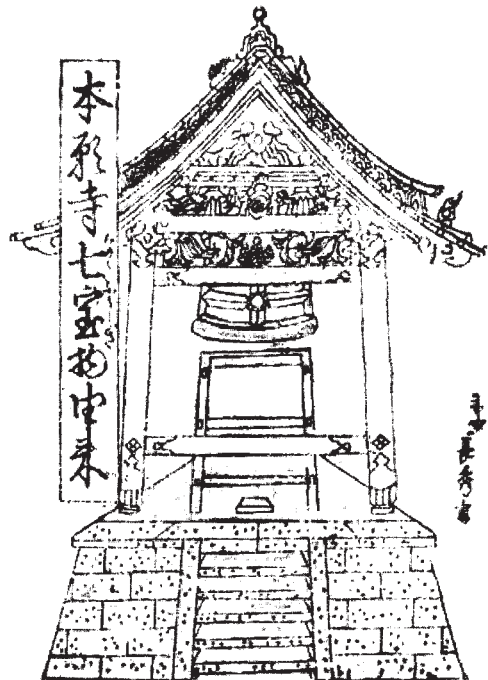
合羽摺というのは、厚い渋紙に描線や文様を切り抜いて刷毛で上から絵具を摺付ける方法で、墨摺版画に色彩を加えるのに用いられた。織物における染色の法と同様で、上方(特に京都)で盛んに用いられ、流行を極めた技法で、まさに『七宝物由来』の表紙がそれであろう。

裏表紙見返しおよび裏表紙には、堀に面した二層の建物・門の絵が描かれているが、これはおそらく、境内の北西に位置する太鼓楼であろう。現在は「太鼓楼」という名称であるが、江戸時代には「太鼓番屋」とも呼ばれており、入口付近には檜のようなものが三本備え付けられ、この建物が、単に太鼓によって時を告げるための場所ではなく、名称どおり「番屋」としての機能も併せ持つていたことを現している。

以下に、『七宝物由来』の本文を全掲する。漢字仮名交じり文で、漢字にはところどころにルビが付されているが、逆に仮名部分の意味の取りにくい箇所には「」で漢字を、また適宜句読点を補った。

入稿後、『七宝物由来 一名なゝふしぎ』がネットオークションに出品された。これは頭如三百回忌にあたる明治二十四年(一八九一)、京都の山内正次郎の編輯・刊行で、一部文字は異なるが、天保のものの再刻である。

(表紙)



「本願寺七宝物由来」

抑御<sup>そもく</sup>本山<sup>ほんざん</sup>の釣鐘<sup>つりがね</sup>ハむかし聖徳太子鑄<sup>しやうとくたいし</sup>させたまひて、  
 太秦<sup>うづまさ</sup>広隆寺<sup>かうりゆうじ</sup>にかけおき給ふところの法器<sup>ほふき</sup>なり。その、  
 ちとぎのへん<sup>(時)</sup>にかゝりて、ちかきほとりのそこなしの  
 いけと申、龍宮城<sup>りゆうぐうじやう</sup>までつうぜしといひつたふるほど  
 のふかき池<sup>(池)</sup>にしづみしが、ある時<sup>とき</sup>ふしぎや一夜<sup>いちや</sup>のうち  
 にすなわきあがり、ひらちとなる<sup>(平地)</sup>。しかるに其中央<sup>そのちゆうちゆう</sup>



すこしたかき所あり。諸人あやしミその所をうがち見るに、つりがねあり。そのこと四方にかくれなく、東寺よりしきりに所望いたし、あまたの工夫をつかハし、ほりいださんとせしに、かねハしだいにそこへしつミ、すこしもうこかざるゆへ、せんかたなく、龍頭に綱を付けてひきし所、りうつのミはなれて、かねハあがらずすべきやうもなく、りうづばかりを持ちかへり。いまに什宝とす。其のち、この鐘村人のゆめにつげていハく、われ仏法はんじやうのれいじやうたる大谷本願寺ニゆきたきぐはんねんなり。ねがハくハ、かのちへおくりたまハるやうにと、つくることたびくになり。此事御本山へもきこへ御しよもうありしに、兼てゆめのつげもありし事ゆへ、むらひととも早速に承引す。それよりほりいださんとするに、此かねおのづからまろびいでたり。人々奇異の思ひをなし、いそぎ御本山へもちまいりつらんとするに、りうづなし。いかゞハせんとうへうぎまぢくなる所へ、いづくともしれず山うばともいひつべき老女一人きたり。われねかハくハ、そのりうづをこしらへ、きしん仕るべしと申てざる。諸人ふしんにおもひゐたりし所に、よく朝かの女附子の木にてりうづをつくり、ぢさんし、はなれし所へあハせミるにかつこう相応し、もとよりい付しりうづのごとく、かねと木と融あひ、すこし

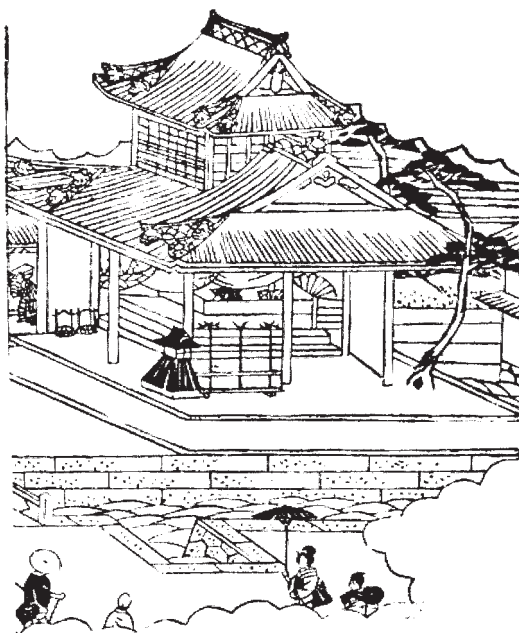
もうぐくことなし。まづこゝろミにいかて撞木を当るに、清調声の聲して、まことに妙なるひゞきあり。それよりしゆるう堂をこんりうあり。これをかけ給ふになにぶん木にて付たるりうづなれば、あやうけに見ゆるゆへに、かねの下にだいをすへてあり。いまにいたりて其さいも其俣にあり。実にまれなる霊鐘なり。一時太鼓ハ太閤秀吉公朝鮮御征伐の時、かの地より取よせ給ひて、はじめハ南都西大寺江納給ふ。其のち西六条、今堀川に御本廟御ぞうゑいの時節、かの太鼓殿下の御ゆめにつぐるやうハ、われねがハくハ本願寺へまいり、ちうや十二時二ときをつげ、仏法にけちるん仕たく間、なにとぞ本願寺へつかハし下されたくと、ねがひしゆへ、秀吉公も奇特におほしめされたいこぼんまでを御奇進あり。右の太鼓を御本山の時(太鼓)のたいことして、寄附し給ふ。此たいこ胴ハ躑躅の木なり。但し胴の内に豊心丹の方書あり。今に下間家(伝来)でんらいするハ、此いはれなり。世にまれなる重宝なり。

一 御影堂向拜柱の杳石を木にて造りあるハ、十三代目教興院様の御代に御しゆふくのみぎり、御庭前に百日紅の老木ありしが、御前の御ゆめに一人のおきなど(現示)げんじつけ奉るやうハ、私百日紅の大木に候。年来ひさかた御にはにせいちやう仕り、无上の大法に

けちゑんし奉る。くはうたいのおんたくをかうむり、  
 なにかな御ほうしやとぞんし奉りしところに、今度ハ  
 御たいそうなる御ふしんをあそバさるゝに付き、何と  
 そ私も御用に御つかひくだされ候ハありかたぞん  
 じ奉るより、ねもころにねがひたてまつる。よく朝御  
 らんある所、さしての風もなきに、其夜の内にたふれ  
 て何か御感の余り棟梁をめししたされ、この木をバ  
 何なりともふしんにもちゆべし、と仰付けられしに、  
 なにぶんみしかき木ゆへにもちゆへき所もなし。しか  
 るにこはいはしらのくついいしそうばんの手あていまた  
 無之、これさいわいのことなりとて、右の木をもて  
 はしらねのくついいしとす。そのち此木くさりしゆへ  
 に、信明院様御代に大御しゆふくのせつ、石にて仕  
 かへ候てハ、いかゞと御うかゝひ申上し所、心をハ石  
 にいたし、めぐりをバけやきにて包ミおくへしとの  
 おゝせに付、けや木の寄木にして四方に金物打てあり。  
 これまたきとくの事にあらすや。  
 一 御白砂水屋手水鉢ハ、往古東寺羅生門にて渡部の綱、  
 おにのかいなを切ていれをきし所の石のからとなり。  
 しかるに此石本願寺へ行度くときまい夜なきしゆへ  
 に、東寺より御本山へ寄附す。それより手水鉢となつ  
 く。天明年中よりゆへありて御殿のおくにはにうつし  
 給ふ。いまおくの御にはにあり。

一 大仲の入口に三面の大黒天の像あり。左り甚五郎の作  
 なり。これハもとふし見も、山の御殿にありしが、時  
 の將軍の御ゆめに末代までながくたいてんなき本願  
 寺へおくりくだされ度と、つげ奉るゆへに、大仲・御  
 玄関・飛雲閣其外御座所まで御きふとなる。まこと  
 にふしぎのれいさうなり。  
 一 黒書院の御庭に梟のとうろうといふあり。これハ御  
 本願御ざうゑいの後、ふしぎなるかな、よく日雨天  
 なれば、其前広にハかならずふくろうなきて、つげる  
 ことしきりにして、つるに晴雨たがふことなしとなり。  
 一 西山御坊に恠知くの面と申あり。応仁年中、天子よ  
 りゆへありて、蓮如上人江たまハリししなり。む  
 かしより変事ある已前にハ、かならずけちくとなき  
 てつけしとなり。それ木石ひじやうのるいといへども  
 ふかく仏祖の恩徳を思ひて、報謝のまことをあらハし、  
 仏法けちゑんをあつくよろこびて、御本願の御高德  
 をしたふこと、かくのごとし。いはんや人倫におゐて  
 をや。此御法流に浴しながら、もし知恩報徳のこゝ  
 ろざしくんバ、あに木石にたにもしかざるべけんや  
 いまその大むねをあげしして、一味の御同朋につげ  
 て、ともに仏祖・善知識の御高德をあふぎおなじく  
 ほうしやのこころざしをぬきんでたまはんことをこひ  
 ねがふのミ。

(裏表紙見返)



(裏表紙)



これには、序や刊記などがなかったため、刊行年代などについては、おそらく幕末に出版されたのであろうと推察できたが、詳細は不明であった。本文中の御影堂沓石の項に、「信明院様御代に大御しゆふくのせつ」とあるの  
 で、本如期の御影堂修復終了後の文化七年（一八一〇）以降の刊であることぐらいしかわからなかった。  
 その後、本願寺留役所で記された「諸日記」<sup>⑥</sup>に関連する次の記事が見つかった。そこには、

一 御堂御白砂茶所ニ於而、本願寺七宝物由来と申繪

草紙同様之物、相売候旨ニ而、其書物差出、表紙

表ニ撞鐘堂之図有之、其七宝と申ハ、

撞鐘 太鼓 向拝柱沓石代木

水屋手水鉢 大御仲居大黒天

梟灯籠 ケチくゝ面

とある。これだけの記述であるが、『七宝物由来』が天保十二年（一八四一）に本願寺の白洲茶所（接待所）において販売されていたということがわかった。しかし、誰が主体となって販売していたのか、いくらで販売していたのか、などの詳細については依然不明である。

本願寺が出版した物ではないと思われるが、本願寺が『七宝物由来』を刊行することや、境内地内で販売することについて、許可をしていたことは確かであり、少なくとも、天保年間には「本願寺七不思議」というものが

成立・確定していたことが判明した。また、茶所内で販売していたことから、茶所の運営に携わっていた摂州接待講が何らかのかかわりを持っていたのではないかと推測される。

このころの本願寺は、財政難に陥っており、大根屋小右衛門（石田敬起）を登用して、財政改革に努めていた。そのため、本来ならば天保十二年に行うはずの顕如二百五十回忌も翌年に延期されている。この本は、顕如の法要に全国から多くの門信徒が参詣することを当て込んで刊行されたのかもしれない。あるいは、このころおこっていた全国的な旅ブームに便乗して、本願寺の門信徒に限らず京の都に集まる人びとをターゲットとして刊行され、その売り上げの一部が本願寺に納められたのであろうか。

しかし、この『七宝物由来』に挙げられた七不思議については、杳石以外のものは、たとえ実際に本願寺を訪れたとしても、見ることはできなかつたと思われる。

#### 名所案内記に登場する本願寺

近世を通して、京の都の各地を紹介した名所案内記が数多く刊行されている。本願寺や大谷本廟（ただし、近世においては、単に「大谷」と表現）を紹介した地誌類も数多く存在している。『新修京都叢書』全二十三巻に収録されている三十九件の地誌のなかで、寛政十二年

（一八〇〇）以前に刊行されたものに限定しても、明暦四年（一六五八）刊の『京童』より寛政十一年（一七九九）刊の『都林泉名勝図会』までの二十一種類が挙げられる。

寛文七年（一六七七）刊の『京童跡追』は、挿絵入りで、大谷に参詣し、合掌礼拝する人の姿が描かれている。江戸時代を通して多くの人が大谷や本願寺に参拝していたことがうかがえる。そしてそれは挿絵にもあるように純粹に信仰による参拝であつたと思われる。

しかし、『都名所図会』が刊行される十八世紀後半ごろになると、人びとの本願寺参拝の理由・目的が、純粹な信仰によるものではなく、物見遊山・娯楽へと変化していったと思われる。

そのように、門信徒に限らず、一般人による旅が盛んとなるなかで刊行された案内記は、単なる紀行文的なものから、先行する地誌をもとにして正確かつ実用的に、また実際に足を運んで得た情報や景観を加えて描写された時には狂歌や俳諧までを挿入し、さらには挿絵を多用した画期的なものとなつていった。それは、それまでの単なる読み物ではなく、草子（草紙）といわれるもののように、目で見て楽しむ物、さらには観光地を紹介する、いわばガイドブックの役割を果たしていった。そして「出版」という方法によって、不特定多数の人の目に触れることになり、それを読んだ人が実際に旅に出ることによって、単なる「読み物」から「実用書」へとその性



格も変化したのである。

名所案内記に記載されるということ

本願寺は、清水寺・東本願寺・清涼寺・積迦堂・金閣寺（鹿苑寺）・法輪寺・野々宮・智積院・千本焰魔堂（引接寺）・長楽寺・知恩院・高台寺・平等院の十二寺社とともに多くの「名所案内記」に収録された。これらは名所案内記が作成される際の核となった寺社とされる<sup>8)</sup>。

全国各地から初めて上洛する人たちは、旅に出る前に「名所案内記」を読むことよって、あらかじめ行く場所や順路を決めることができた。これらの十三寺社は、京都を訪れる人が、十三箇所全部かどうかはともかく、このうちのいくつかには、必ず立ち寄り場所、それはすなわち「名所」といわれる場所であるともいうことができよう。つまり、「名所案内記」に記載されるということとは、実際にその地を訪れた人にも、そうでない人にも「名所」として認識されていた場所なのである。

そのため、これらの寺社は信仰の対象として参詣する場所ではなく、「名所」として描かれているため、「強い宗教的聖性の絵解き要素を排し、名所としてより客観的に空間をとらえようとする意図がある」とされる<sup>9)</sup>。さらにそれは、当時の寺社境内を正確に描くことに重点がおかれている点からもうかがえ、これら境内は、具体的に浮世絵などでよく用いられる平行遠近法を用いて描き、

また人物の大きさに変化をもたせることでその広さを表現している。そしてこれらの技法を用いた挿絵によって、寺社の宗教的空間としての神聖性をおさえ、世俗性を高めることを強調している。すなわち、寺社を名所化している<sup>10)</sup>のである。

その結果、信仰心からではなく、単なる物見、観光として本願寺を訪れる人が増え、そのいっぽうで本願寺の紹介のされ方も、観光地的な案内へと変化していくことになる。

それは『都林泉名勝図会』（寛政十一年（一七九九）刊）に見られるように、本願寺の宗教的要素を含まない年中行事である「七夕の籠花」と「盆の灯籠」が、挿絵入りで大きく取り上げられている点からもうかがえよう。つまり、ここでは本願寺の宗教色を払拭し、俗世間的な年中行事を紹介することよって、本願寺を観光寺院の一つとして位置づけたのである。

また、このような名所案内記にみられる世俗化は、京都から遠く離れた地にいる本願寺門信徒のみを対象としたものではなく、洛中・洛外、あるいは畿内周辺といった比較的近い場所からの旅（＝観光）のための手引きとなる物でもあったと思われる。そのため、掲載順に道順を示した版本も多く刊行され、その本を片手に寺社を巡るといふ観光コースも設定され、それらのコースに本願寺が組み込まれ、短期間の旅に手軽に参加できるようになったと考えられる。

ただ、『都名所図会』は、その判型も大きいことから、実際にそれを手にして旅するのではなく、旅に出る人が国元で読む物、あるいは旅に出ることが叶わない人たちが、家などで見て楽しむ、名所の様子を想像するものとして利用することが多かったと思われる。そのため『都名所図会』に収録された寺社の多くは、実際に旅に出る人だけでなく、遠く国元の家にいる、実際には参詣していない人たちにも「名所」として認知されることになったのである。

また、名所案内記に紹介され、描かれた本願寺は、その内容について特に制限を加えるものでもなく、問題にしていた形跡もない。『都名所図会』の作者である秋里籬島と版元書肆である吉野屋為八は、本願寺と関係が深かったことも指摘されており<sup>1)</sup>、本願寺としてもその宗教性のみを追求した参詣ではなく、一般観光客をも受け入れる、という現在の本願寺への参拝者の姿と同じで、「名所」として紹介されることに対して、何の異論も無かったと思われる。

おわりにかえて

本願寺のことを紹介した地誌類は、前に挙げたように二十種以上確認できるが、『七宝物由来』のように本願寺だけを取り扱った版本は、ほとんどその例を見ない。本願寺だけを採り上げた版本は、『七宝物由来』以外で

は、安政七年（一八六〇）刊の『大谷家土産』（おほたにのいへづと）という版本があるくらいである。これは本願寺境内の建物を中心に、学林・興正寺・常楽寺・大谷本廟・御茶毘所旧跡・北山御坊・西山御坊・山科御坊・蓮如御廟・実如御廟・証如御廟・円如墓所・宗祖往生旧地、さらに附録として宗祖誕生地について紹介・解説した挿絵入りの本である。

刊記によると、「御本山御用御書物所」とあり、京都書肆の永田調兵衛・菱屋卯助が発行している。

これらは京都で、実際にその本を手しながら旅をするガイドブック的性格のものではなく、『大谷家土産』の序に、「一名六条みやけといふ」とあって、さらには「故郷に携へ、空しく国に残れる信者に与なば、これに勝りし家づとはあらじ」とあるように、実際に旅に出ることが叶わなかった人たちへの土産として刊行された物であったと思われる。そのため、判型も小さく、また頁数も少なくして、旅の手荷物として負担にならないようにできるだけコンパクトな小冊子に仕上げる必要があったと思われる。

そして、これらの本は旅人が家に帰った後、旅に出られず留守を預かっていた人たちに見せつつ、土産話をすることによって、本願寺参拝の記念品として多くの人に楽しまれ、また旅の醍醐味や本願寺参拝の臨場感を与え、参拝の感動を共有することができたと思われる。

このような『大谷家土産』や『七宝物由来』といった

本願寺だけの説明書が刊行されたということは、かすかすの名所案内記に紹介された本願寺が、自他共に「名所」として認めていた（認められていた）ことを示す史料であると思われる。

しかし、それは単なる観光地の土産物とするだけではなく、『七宝物由来』の末尾に「一味の御同朋につけて、ともに仏祖・善知識の御高德をあふぎおなじくほうしやのころざしをぬきんでたまわんことをこいねかふのミ」と記されるよう、帰国した後、本願寺での土産話を人びとに告げるとともに、報恩感謝の念仏を称えることが大切だとしているのである。

戦前まではまだ、交通手段がそれほど整っておらず、京都より遠く離れたご門徒さんたちは、「一生に一度は本山参り」というほど、本願寺への参拝を願っていたという。現在でも、御正忌報恩講・大遠忌などの法要には、全国各地から多くのご門徒さんが団体で参拝され、また観光シーズンには、修学旅行生を始め多くの方が本願寺を訪れている。今回ご紹介した「本願寺七不思議」の話が、それまで浄土真宗に触れる機会のなかった方がたが、本願寺に少しでも関心を持ち、本願寺を参拝する機縁になればと思ひ、さらには観光で本願寺を訪れた人が、帰宅後、本願寺や親鸞聖人のことを話題にしていたくださりかけ作りの一助になればと願うものである。

(おおはら みよこ 本願寺史料研究所研究員)

〈注〉

- (1) 田中緑紅「西本願寺の七不思議」(『郷土趣味』第十五号、一九一九年、一九八四年復刻発行所収)。
- (2) 『教海一瀾』八四〇号(一九三七年一月五日発行)所収。
- (3) 上原芳太郎『蓮位と頼恭』(一九三九年)二八六頁。
- (4) 藤懸静也『増訂浮世絵』(雄山閣、一九四六年)一九九頁。
- (5) 宝暦十年(一七六〇)刊「京西六条本願寺御大絵図」。
- (6) 天保十二年五月「留役所諸日記二」五月十一日条(本願寺史料研究所保管)。
- (7) 一九六七〜七六年再版、臨川書店。
- (8) 塚本章宏「近世京都の名所案内記に描かれた場の空間的分布とその歴史的変遷」(『GIS—理論と応用』一四一〜二、二〇〇六年所収)。
- (9) 長谷川奨悟「『都名所図会』にみる十八世紀京都の名所空間とその表象」(『人文地理』六二―四、二〇一〇年所収)。
- (11) 藤川玲満「国文学研究資料館蔵『秋里家譜』翻刻と解説」(『国文』一一〇号、二〇〇八年所収)、および同「吉野屋為八の出版活動」(『国文』一〇八号、二〇〇七年所収)。

## 【編集後記】

もったいない気もするのですが、今回は頁数が少なくなつてしまいました。

編集子個人を取り巻く状況は、「唇が寒い失語状態」が続いています。時間と気持ちの余裕がある時に、生の史料を研究所で展開することと、本を読むことで日々をかううじてやり過ごしているような状況で、二〇頁を目指して「埋め草」を執筆するネタの仕込みができていません。

そんな中でのとびきりの読書の一冊が、中井久夫氏の『日本の医者』（日本評論社・こころの科学選書）。自宅で三年以上も積ん読になっていた本の山から発掘した一冊です。刊行されたのは二〇一〇年九月なのですが、中身は五〇年ほど前に中井久夫氏が三一新書で『日本の医者』（一九六三年）と『病氣と人間』（一九六六年）に「榆林達夫」の筆名で執筆された部分と、一九六三年より六四年頃に岡山大学医学部自治会よって印刷された「抵抗的医師とは何か」を合体させたものです。久方ぶりに読書の充実感に浸ることができました。この本に出会えて、そして読み通すことができて、良かったという余韻が長く続いています。

JR京都駅や京都の繁華街を通過するときには、大型の本屋をのぞくことが習性になっていますが、店頭で実際に購入するのは、新書か文庫のみ。背文字に惹かれた単行本も、実際に手にとって中を少しみると、「読むかな？」の思いが強くなり、結局、棚に戻してしまうことも習性になっています。しかし、その本は、帯にあるキャッチコ

ピーに気がついていれば新作ではないことはあきらかだったのですが、ファン心理が働いて五十年前の執筆と気がつかずに、単行本としては珍しく書店で購入しました。帰宅してからあらためて手にとって気がついて、少しガツカリ。その結果が、三年ほどの積ん読本となった次第です。

三一新書といえば、学部学生のとくに読んだ、埴谷雄高編著『内ゲバの論理』（高橋和巳・鶴見俊輔・久野収らが執筆。一九七四年）が印象に残っています。当時は大学生協の書籍部に、三一新書も並んでいましたが、その中に『日本の医者』と『病氣と人間』もまだ並んでいたのかどうか判りません。しかし仮に手に取るものがあつたとしても、絶対に購入しなかつただろうと思います。還暦を過ぎたから出会えたからこそその読後感になつたと思っています。医学をとりまく制度は、この五十年の経過のなかで大きく変化していますが（当時は無給のインターン制度があつた時代です）、医学・医師の現状は五十年前の中井氏が物静かに批判された状況を克服できていないと、素人ながらに、これまでに出会った医者にパターンリズムを感じることが多かつた編集子は感じます。

編集子は、畑違いの中井氏の著作を、どこまで理解できているのか甚だ心許ないことを正直に告白しておきます。では、なぜそれほどまでに心を引かれているのか。うまく説明できないのですが、敢えて言うなら、文体や行間ににじみ出てくる、知性のたたずまい、ということになりそうです。

（歩弥紡）